



UNESCO
NGO JAPAN
群馬県ユネスコ
群馬県ユネスコ連絡協議会

会長 関口 実 副会長 北川紘一郎・矢野 薫 事務局長 若田部茂子 事務局 群馬県教育委員会生涯学習課

つなげよう平和の心 広げようユネスコの輪



昨今のユネスコ事情 群馬県ユネスコ連絡協議会

会長 関口 実

去る七月十二日、日本ユネスコ協会連盟の元事務局長、寺尾明人さんが五十八才にて、スキルス性胃がんで亡くなられた。

過去三十年間、日本ユネスコの顔として、いつも明るく振舞っていた人でした。その明るい言動の裏に、たくさんの矛盾も抱え、厳しいプレッシャーに晒され続け、寿命を縮めてしまったのではないかと、と思わざるを得ません。衷心からのお悔みを申しあげます。

さて、私は県ユネスコ連絡協議会長の職にあつて三期六年になります。この間至らないことだらけでしたが、それなりに感じたことなど、いくつつか取りあげてみたいと思います。

一、ユネスコって何？
私の地元のユネスコは結構歴史も長く、あと数年で五十周年を迎えます。ユネスコ活動もかなり充実していると感じています。でも新しく会員になる校長や市議会議員さんたちがよく、「ユネスコって何だい？」と問いかけてきます。こんなときのために、私はA4版の紙一枚の表にユネスコの誕生のいきさつと「ユネスコに関する法律」の一部を抜粋したもの、裏面に私たちユネスコ協会の自己紹介を記載したものを常時用意して、必要に応じてお渡しし、ジックリ読んでいただきます。そのせいか、昨今、「ユネスコって何だい？」という声が聞かれなくなりました。

二、ユネスコ活動は何をする？
どこのユネスコも金がない、権力もない、行政力もない。ないない尽くし

の中で、地域の人たちの協力を得るには、地域のリーダーたちとお友だちになることからスタートしなければならぬと考えています。

「学校や教育委員などは敷居が高く入れない」という声をよく聞きます。だからこそ、目的もなくフラリと立ち寄ることに意味があると思います。友だち感覚で雑談が弾むようになれば「ユネスコは何をやってるんだい」といったことも出てきます。このような流れからユネスコ活動が動き出せば、文字通り、地域に根ざしたユネスコ活動が誕生するのではないのでしょうか。

三、「地域に「交流協会」が誕生
「うちの役所に交流協会ができるぞうだ。ユネスコと同じことをしよう」と考えているようだ。困ったことだ」と交流協会誕生をライバル視する声を聞いたことがあります。私は、同じ地域の行政側に志を同じくする力強い仲間ができる、と喜びたいのですが、いかがでしょう。

四、金のかかるユネスコ活動
昨年、高崎市で、六年に一回、順番でまわってくる「関東ブロック・ユネスコ活動研究会イン群馬」が開催されました。

関東ブロックとは、東京、埼玉、群馬、栃木、茨城、千葉の六都県で構成され、毎年いずれかの都県が交替でユネスコ活動研究大会を開催するものです。ところが、いつからか、この大会には莫大な予算と手間をかけるようになっていました。東京は比較的クル

に対応しようとしていましたが、その他の各県はこの時こそ、わがユネスコの頑張っている姿勢を他都県に見せたいと、全力投球で臨んでいました。美しい大会開催案内状、カラー写真の表紙にスナップ写真盛り沢山の大会誌、開会式には県のトップを揃え、アトラクションに日本を代表する講師をお招きし、大会後には近隣の名所旧跡をめぐるスタディツアーを組み、後日には、立派すぎる大会報告書を作成します。

この実状を憂えた日本ユネスコ協会連盟からは、一昨年の夏、関東ブロック研究大会の開催について、各都県に自粛を促す指導がありました。でも、他県の頑張り比べて、絶対に見劣りしたくない、負けたくない、誇り高い根性は見上げたものです。群馬大会も、関係者懸命の努力により、研究発表内容を含めて高い評価をいただくことができましたが、県ユネスコ連絡協議会の予算面での打撃は相当なものがあったと認めざるを得ません。

群馬県下のユネスコ活動に注ぐべきお金が、かなり失われてしまった、ということも事実です。

この問題は群馬県にとどまらず、関東各都県の深刻な課題です。今年度開催される栃木大会はどう展開されるでしょう。その次年度の茨城大会はどうなるのでしょうか。そしてその次の千葉大会は？

本来、地道に、国や地域の間で、お互いの理解を進めるべきユネスコ活動が、平和ボケして、ポイントとなるべき点が形式的な方向に流れはじめたのではないかと心配になります。真摯に取り組むべきスポーツの祭典オリムピックについても、前回開催地に負けない施設にしようなどと過熱しているようです。ライバル意識は人間の「さが」なのでしょうが。